



七月二九日、上川管内当麻町においてフォーラム実行委員会と北海道有機農業研究協議会の共催で「食糧問題フォーラム・inとうま」が開催されました。

『今こそ日本農業と食の再生』をテーマに、全道各地から約二〇〇名が参加、滝川康治氏（農業ジャーナリスト）の司会でパネルディスカッションが行われました。

パネラーの福山憲昭（当麻グループ84）、伊藤雄一（当麻グリーンライフ研究会）、神原昭子（日本消費者連盟）、山本毅（道立中央農業試験場）、田鎖忠利（コープさっぽろ）の五氏から、それぞれの経験と立場から「安全な農業と食糧」について所信が披瀝されました。

地元の町長、JA組合長をはじめ会場の参加者も討論に積極的に加わり、予定時間を延長しての白熱したフォーラムとなりました。

なお、フォーラムに先立って、竹熊宣孝氏（公立菊池養生園診療所長）から、「命一番・金は二のつぎ」と題する基調講演が行われたので、本誌にそのあらましを紹介いたします。

（紹介記事文責・編集担当 土屋 一彦）

# 『命一番・金は二のつぎ』

熊本県公立菊池養生園

診療所長 竹熊 宣孝

## 食べ物のこと、地球のこと

私は農家の七人きようだいの次男坊として生まれました。医者になろうと志したのは、すぐ下の弟が、当時使用されていた農薬のホルドール撒布を手伝っていて、その

回は、長野県で「若月賞」の授賞式があり、その足で当地に來ましたので持ってこれなかつたのですが、地球は極めて危ない状態になつてきています。

の中毒に罹つたことがきっかけでした。農村医療に携わつてから二〇年後に、「農村医療」+「土」にチャンネルを変更したのですが、今また、チャンネルを変えて、「地球」を考えています。

私たちは、月や星を見ることは出来ませんが、地球を見ていないし見えてもいらないのです。だから平気で、この地球上に食糧を乱暴に撒き散らしているのです。特にこの日本で……（注一）

私は、いつもの講演には靴の中に地球儀を入れて歩き、くだびれきつている地球の姿をみなさんにも見てもらいながら、熊本弁で話（養生社説法）をしています。今

私の養生園には、欧米やアジアの各地域から外国の人も多数訪れますが、彼らの目には、日本人は食べ物のことを全然知らない民族と映っています。（注二）

一つの事例として、病院勤務する栄養士に、「牛乳はどのようにしてつくられるか」と尋ねますと、「牛から搾る」としてその牛は「草を食べて乳をつくる」と答えます。……これは事実には反していません。今の牛は、外国からの穀物

飼料で生かされているのです。その事実を知らないから、当然、ポストハーベストのことも知らないわけです。外国人は、ある程度の教育を受ければ栄養士でなくても、ポストハーベストのことは常識として知っています。

## カネ至上主義の困った社会風潮

今日の日本は、命より金のほうが大切だとする風潮が蔓延しています。昔は、病気見舞いで最高のものはタマゴでした。タマゴが命だったのです。昨今、特にお偉方への冬の病気見舞いには、農薬を少し多めにサービースした桐箱入りのメロンでしょうか。

「いのち」に支えられています。それにプラスして、水、空気、太陽という「いのち」にも周りから支えられて成り立っているのです。ところが日本の食生活は、アメリカ仕様による国民の餌づけを、日本栄養士会が学校給食を通じて押し進めてきたこともあって、じつに歪んだものとなつてしまいま

▼竹熊 宣孝さん



略歴

昭和九年、熊本県山鹿市に生まれる。昭和十五年、熊本大学医学部卒業。昭和四〇年、熊本大学大学院卒業。医学博士。専攻は内科学・血液学。琉球政府立中部病院勤務、熊本大学医学部講師を経て、昭和五〇年より公立菊池養生園診療所所長として現在に至る。

絶食療法は甲田光雄医師、東洋医学は韓国の鮮干基（ソンヌキ）医師に師事する。日常の診療活動のかたわら、養生説法、講演に活躍。全国から一万人以上の人々が養生園を訪れている。自ら有機農業を実践し、「医は農に、農は自然に学べ」をモットーにしている。

著書に「土からの医療」（第一回熊日新聞社出版文化賞・受賞）、「土からの教育」、「鎌と聴診器」、「田舎一揆」、「米とかあちゃん」など多数。

本年七月二十七日、人それぞれの信念と理想に従って真摯に保険医療活動をする人を顕彰する第四回「若月賞」を受賞。

した。（注3）

「食物」のときは命の源だったものが、「食品」になってきたときカネも取り込んでしまったのです。

社会全体に、経済至上主義が横行しているのです。日本の紙幣に載っている人物はご存知ですね。最も価値のある一万円札は福沢諭

## 国際食と飽食のツケが！

食生活を、もう少し検証してみましよう。タマゴ焼きに砂糖を入れる国民は日本だけではないでしょう。我が国の国民一人当たり砂糖の消費量は二五kgにもなっているとの見方もあります。その一方で、コメの消費量が七五kgから五〇kgまで減少していくといわれますが、その分が砂糖に置き換わ

るのでしょうか。（注〇）  
糖尿病患者は、現在、国民一〇人に一人の割合でいるのです。癌に至っては、四人に一人です。癌という字は「品」物が「山」ほどある「病」ですが、まさに現代の食生活を象徴しています。

「国立がんセンター」の名付け

吉ですが、この人は、「脱農脱單」を唱えたことでも有名です。そのことの功績もあつて、お札の肖像になったのだろうと私は推測しています。経済第一主義の国政のあり様に、まさに符合しているとは思いませんか。

親は、当時の医師会会長の武見氏ですが、私がお会いした折に、漢字・ひらがな・カタカナと日本語の全てを使ってあるのだと自慢気に話していました。

当時も今も医者は、「がん」を見つけることは出来ても「癌」の原因は分かっていないと言えます。

「国際食」と「飽食」を、当たり前のこととしてつづけてきた過去三〇年余りの食生活は、日本人の身体を確実に蝕んできているのです。特に、ストレス、タバコ、宴会の多いサラリーマン男性は、病気をたくさん抱えており、女性やほかの職種の男性に比べてボケるのも早いのです。（注4）

これを予防するためには、ヒヤミンやミネラル、食物繊維を多く含有するカボチャやニンジン（九州ではモロヘイヤがちよつとしたブームです）、サツマイモやジャガイモ、さらにマメとコマを十分

## いまこそ土の教育が大切

「農」はその語源のとおりアグリカルチャー＝文化ですが、最近の我が国では、大変軽んじられる傾向にあります。特に、今の若者は、土は汚いから嫌いだと言いま

す。これは、教育の貧困さからきています。偏差値一辺倒で、土からの教育がされていません。農家でも就学中の子どもが、家の田畑で農作業を手伝うことがきわめて稀になつてはいませんか。

人間は金で物の価値判断をしますが、野性動物は金が無いから食物をあさつて自然の中へ入つていくことで、癌にはならないのです。熊が癌を患つたとお聞きになつたことがありますか。

「養生園」には、若者たちも教育実習に来ます。自分たちで料理

に摂取することです。

ただし、コマは胚芽部分に栄養素が含まれているのに、大多数の日本人は「カス」部分の白米を食べて、大事な胚芽を捨てています。

も作らせるのですが、日本の高校生は日本式カレーライス、インドの若者は伝承に基づいた本物のカレ、韓国の高校生は砂糖をまったく使わない穀類の料理とキムチを作ります。

外国の若者たちは、その国の食文化をきちんと受け継いでいるのです。虫歯に罹っている韓国の若者がいないことや、オリンピックなどでの活躍ぶりには学ぶべきことが多いのです。（注5）

スポーツといえば、日本の若者はサッカーでしょうか。長じてゴルフ、その後にゲートボール、そして最後は、腰掛けたままでもできるパチンコと球遊びがつつま

す。みなさんは、有吉佐和子さんが書かれた「複合汚染」というノン

フィクションをご存知でしょうか……。

この春、熊本大学医学部に入學した一〇〇人の学生に尋ねたところ、知っていたのはたった一人、

## 子々孫々まで「命と地球」を守り継ぐ

「農」は命を作る源です。「医」はあくまでも修繕屋なのです。医者の出番になつてからでは遅いのです。農業は酸素の製造元、「たつたひとつしかない いのちと地球」を守つていくネットワーフを作つていきませんか。

これ以上の長生きを必要としない年齢に到達した人は、どんな食生活をしても構わないでしょう。仮に砂糖をいくら摂取しても入れ歯なら虫歯に罹る心配がありませんから……。

しかし、若者と、つぎの世代を誕生させる立場にある妊婦には、正しい「命の食べ物」を摂取してもらいたいのです。

特に妊婦は、その妊娠期間の一〇カ月分は、すべて無農薬有機米などの国産食材を摂取すべきです。（注7）

しかも、その学生は三六歳でした。医学生にして然かりですから、若者の全体水準は推して知るべしです。「命の教育」の大切さを痛感します。（注6）

地球は、レスター・ブラウン氏の警告を待つまでもなく、酸性雨や砂漠化など、憂つべき環境破壊が進行しています。

この「たつたひとつしかない地球」を救つのは農業だけです。農村では、若者が次々と都会のコンクリートの中に出ていって過疎化が進んでいます。担い手の問題はどこでも深刻です。

地球を救うためだとしたら、役場や農協の職員が（現職の間は兼業農家で……）定年退職後は、専業農家に就けばいいのではないのでしょうか。そうすれば農家数も減少せず、命の源の農地も維持していけるのではありませんか。

人間とは……、この世をどのように生きつづけ、そして、どのように死んでいくのかが大切なのだ

注 竹熊宣孝著『米とかあちゃん』Ⅱ粗末にするとはちかぶるⅡ

(平成6年7月29日・家の光協会発行)から関連著述。

1) P 26 ◆日本人の平均寿命は世界一ということですが、体力からみると、かなり低下しています。心臓や肝臓の奇形も臓器移植の問題として、今日、医学の話題の中心です。一方では地球そのものが病気になるています。空気も汚れてきた、水も汚れてきた、地球の温暖化が進んでいる。オゾン層が破壊されている……。なぜ、こんなことになったのでしょうか。答えは、おそらく誰でも知っているはずで、

『お力だけを追いかけたから』。しかし、このことをあまり口にする人はいません。利益第一主義、効率一辺倒がこの国を支配しているのですから。ますます大きな力ネを生まないもの、効率の悪いものは、それだけで「悪」になってしまつたので

2) P 12 ◆いま、家庭の冷蔵庫には食料品店のように食べ物があふれています。国産のものだけでなく、輸入食品もいっぱいある。そして、大人はグルメと称して美食に走り、子どもはファーストフード店に行列をつくる。こんなに食べ物があふれている時代は、かつて一度もなかったはずで、それなのに、日本人の生命力は下降の一途をたどるばかり。食生態学者・西丸震哉さんの、「四一歳寿命説」などが飛び出します。

なぜ、こんなことになってしまったのでしょうか。それは、私たちの目に、いのちというものが見えなくなつたからです。

3) P 63 ◆米国は、日本の防衛費増を迫ることによって、経済力を抑えようと考えたが、東西冷戦の解消によつて大義名分を失し、米自由化作戦に戦略転換したと考えられないだろうか。かつて、キッチンカー作戦によつて、粉食文化を日本に導入し、日本人の胃袋をアメリカのコントロール下に置くことに成功した。最後のとどめが、米作戦のように思える。

4) P 79 ◆もし、癌というものが、病は口からというものであれば、全体的、いや国際的レベルで発症しているのだから、原因究明は簡単ではあるまい。字の示すところ、品物の山の意味を考へれば、食の近代化と国際化の意味はまことに重大である。

いわゆる人間がつくり出した近代文明とみなくてはなるまい。それを加速しているのが近代農業ではなからうか。医の前に食があり、食の前に農がある。われわれはそれを忘れている。

5) P 16 ◆養生園に学びに来た学生に、どんな料理が自分で作れるかと聞いたことがあります。日本の学生は「カレーライス」と答へ。韓国の学生は自分たちでキムチを作りました。過酷な受験戦争を戦ってきた彼らが、韓国の伝統的な食べ物を手ぎわよく作ったのです。インドから来た青年は、コックでもないのに、みことなカレーを作りました。

：大人たちがグルムプムに浮かれている間に、子どもたちの食環境、ひいては健康状態がかなりおかしくなっているような気がします。農村も都会同様、いやもつとひどいことになりつつあります。テレビの影響でしょうか。また、スーパーだつて全国至るところにあります。御用心！御用心！

6) P 95 ◆講演会などで小学校へ行くと、校長室に「習育」「徳育」「体育」という文字が掲げられているのが目につく。子どもたちが健康で逞しく育つには、はたしてこれだけでいいだろうか。できたら「食育」も加えていただきたい。

行政は決められたことしかやらない。政党や政治家は子どもたちのいのちより自分たちの政治生命のほうが大抵である。人は皆、口先ではいのち優先を唱える。しかし人も社会も病気のほうが先行する仕組みになっていることをお忘れなく。

7) P 59 ◆止まらない汽車に乗つたわれわれは、どこに行くのだろう。天国行きのキップを片手に、歌え、飲めやの大騒ぎをしているような気がしてならない。それを進めてきた大人たちは、それでいいとしても、次の世代の子や孫まで道連れにするわけにはいかない。

注8) <編集担当補足>

農林水産省「食料需給表」Ⅱ国民一人当たり食料消費Ⅱ一年当たり供給純食料(平成五年統計)では「米」六九・二kg(昭和三五年一四・九kg、四五年九五・一kg、五五年七八・九kg、六〇年七四・六kg)「砂糖類」一九・三kgである。

## 養生狂句

米はいのち、いのちは高い安いじや買えんばい。そるがわかるとは死んでから。

あちやらん国から、エイズと米が攻めちくる。予防注射はなからうか。

米とかあちゃん、粗末にすると、バチかぶる。

バチ当たり、よそん米に浮気する。その浮気癖が、わが国の持病たい。

覚えとけ、米んなかときゃー知らんぞー。また分けてくれと言いなすな。二度あることは三度ある。

『米とかあちゃん』

(一三〇ページから転載)

